

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 168: 149-158
Issue date	1918-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6867">http://hdl.handle.net/2298/6867</a>
Right	

ぬきざなり。(南清之助)

## 第二十八回開校記念之記

### 記念式

武夫原の松の緑は變らねど逝く時もはや我が校の誕生日となりけり、この日朝晩麗らかにして光榮するき龍南に生氣を湛ふ。

十月十日午前十時吾人九百の健兒吾校二十八年の歴史を回顧しつゝ、濟美館なる記念式場に入る。開式宣せらるゝや校長の式辭小松教授の教員總代祝辭、桑原總務委員の生徒總代祝辭、來賓佐柳市長祝辭朗讀あり。つづいて記念の式歌壯重に響き渡れば之より例年の如く記念式歌の朗讀嚴肅に行はれたり南、塩谷、桑野三新体詩、今田漢詩なりとす。之につづいて劍道柔道の演武あり十一時半頃終りを告げぬ。

### 記念運動會

前日より忙がしかりし裝飾に今日は正門のアーチの

輝く美しさ。日光に光彩淡離たり。漫畫は圖書閱覽室なる龍南新聞社を中心に滑稽なるもの面白く張出されぬ豫定の如く一時より運動競技開始す。龍南新聞は時々發行せられて觀集に興味を與へぬ。十二回競技の終る頃小雨襲ふ時に二時十五分。群集堵を成せるものや、狼狽の氣味ありしも雨歇みぬ。三十三回に至りて小雨再びいたり歡衆崩る競技續行を危ぶしに空晴れて雨露芝生を和げ絶好の運動場と化せり時に五時に切迫し對部競走に遷る。四時四十分頃先づ一部の大太鼓を曳廻す大示威運動あり。鼓上に四人あり一人旗振り一人扇子とりて舞ふに似たり。一部生全体の應援團長に對して禮の終るや『デカンショを心ゆくばかり歌ひますぞ』の鼓上指揮官の命令もて一同高唱進行する様、觀客をして腹を然らしめたり次に二部一周優勝旗返却。籤醫者くたばれ三百代言バノバノバーの大旗立てゝ大太鼓を曳く亦同じ、三部の示威は他に比して見劣りせり。

五時に式終る。こゝに對部競争は一發の銃聲と共に生命の爭奪の如く展開せられぬ第一廻より第三廻までは綠先驅してあはれ勝者の榮を思はしめしに第四

廻に至りて白突如突出して緑の意氣大いに沈む。紅同じく白を逐いて緑を抜ぐ。紅、白を抜がんとして追尾急なりしに遂に果さず。あはれ今年の競走は再び白の勝利となりけり。二分十七秒九にして白勝ちぬ。二部の意氣原頭を壓し一部の健兒悲風颯々恨原頭に遍し。あゝ。(南)

### フロスカントリーレース

十月十一日快晴東蘇峯秀美。午後一時三十分、武夫

## 懸賞文審査結果及批評

等	級	到着順	文	題
第一等	5	12	白香山の生活と其二雄篇 (小説)清吉	作
第二等	3	10	五個條の御醫文 (小説)蓑夢の花	者
第三等	11	9	(脚本)心と心	總點
第四等	4	8	快樂及び生活のイズムとしての快樂主義の可否 (小説)彼岸の夜	平均點
第五等	1	2	(小説)町へ	
第六等	6	7	(小説)若き亡母	
第七等	2	3	自我の旋律	
第八等	1	4	(小説)何の爲め	
第九等	7	5	(小説)夜店	
第十等	3	6		
第十一等	4	7		
第十二等	5	8		

原を發する健兒の影、一時四十一分より第一關所商業學校前を過る者五十六人。第二關所本妙寺、第三洗馬橋、第四紀念碑、第五水前寺、第六藤崎宮を経て無事三時までに武夫原に達せる者四十八人例年の如く三部最優勢。二時三十一分六己に歸還せりと思しく藤崎宮にて銃聲をきゝぬ。

何處の關も歡衆堵をなして各關所よりうくる色襷まどへた健兒のすぐるをば迎ふるありき。この日は三部の歡樂を歌ふをきゝぬ。(南)

作	者	總點	平均點
一、三、甲二	今田哲夫	四〇二	八〇、四
一、二、丙	佐々木高遠	三九九	七九、八
一、三、丙	中野峯夫	三八七	七七、四
一、三、乙	池田小二郎	三八六	七七、二
一、二、丙	淺野正一	三八三	七六、六
一、三、乙	桑野豊助	三七〇	七四、〇
二、三、甲二	貞清玄龜	三六七	七三、四
二、三、甲二	由布俊一	三六七	七二、四
三、一	光瀬俊明	三四八	六九、六
一、三、甲一	南清之助	三三九	六七、八
三、一	井丈七矢(假名)	三三六	六七、二
一、一、乙	花田鐵太郎	三二八	六五、六

## 懸賞文批評

教授 西澤富則

應募文十二篇、とりどり面白く拜見しました。概觀するに、そのあるものを除いては、應募者諸君の努力の程もしのばれて、その豊かなる出來榮え、誠にたのもしくも亦うれしく感ぜられました。殊に創作に於いては其の水準のいや高まれるのを切に感じました。しかし例に依つて、現代學生の最もうれひとする誤字、當字、假名遣ひの誤り、文法の無視等の甚だ少くないのは、今更ながら驚くの外はありません。些事乍ら——否な些事ではありません、苟しくも筆執つて應募しようといふ程の人は此邊にも十二分の注意をして頂きたいと思ひます。

『若き亡母』の如きは假名遣ひの誤りが殊に多い。且つ用語生硬、會話難澁、題材陳腐更に一層の精進努力を要します。

『何の爲め』稚氣を帯びてはゐますが、思ふまゝを率直に、大膽に、ぐい／＼云つてゐる所が氣に入りました。筆致の洗練に意をいたす可きは勿論です。好箇

の小品文ではありますが。

『自我の旋律』筆者は眞面目です、眞剣です、何事をか云はんとしてゐます。しかし、讀者に與ふる感銘は全く其の正反對です。支離滅裂です、亂暴です。更に悪く言へば鬼面人を嚇すものです。内容の貧弱に比して、いかにその篇章の分類の仰々しい事でしょう！之れを一貫せる——少くとも統一せる思想の論文として取扱ふのが間違つてゐるのかもしれない。筆者の心情に對する大いなる冒瀆かもしれない。妄評をあへてせざるが、むしろ論者に對する最上の禮でもがなございませう。

『夜店』いやみのない寫生文、あつさりして、銜は飾らざる筆致愛す可きものがあります。けれど、かういふ作にはなるべく客觀描寫の一本調子で行つて貰いたい。なまじい主觀的心理解剖などをするのは禁物かと思はれます。

『彼岸の夜』テーマは決して新しいものではありません。描寫の手は割合に堅實です。あれだけの人物を此の短篇の中にこれだけの程度迄に躍動せしめたのは決して凡手ではありません。女子の心理描寫に於

ける繊細なる神經のはたらきは、かけ出しの作家などの及びがたい *Nartheit* を示してゐます。しかしもう一息といふ所です。

『町へ』表現に新味があります。筆は暢達、自然觀照及びその敘述に及びがたい節があります。その作風に有島武郎等の感化がある様に見受けられます。

神經は頗る鋭い、そして *grübeln* する所はヘッベルに一寸似た所があります。佳作たるを失ひません。

『蕎麥の花』此の作家には他の企及し難いオリヂナリチーがある。そのいふ所に獨斷的な、オルトドックスめきたる節なきに非るも、豊なる藝術の才がのほの見ゆるのはうれしうございます。繪畫的な、解剖的な自然描寫も推服するに足るのがあります。比較的オリヂナルの色彩に富む作品として推稱いたします。『心と心』應募文十二篇中の唯一の脚本です。心と心とは侍女葵の心と重盛の臣時忠との心を謂ふものでせう。して見れば更に軒膽相照す兩者の心、殊に葵の心情をもう一層近代的に、白熱的たらしめば、更に一段の劇的效果をかち得たでせう。叙事詩を劇詩となすの意義に、作者のもう一層の注意を拂れん事

を望んでをきます。

『白香山の生活と其の二雄篇』應募文中の最長篇です。附記して五年に亘る研究といふ、さもあるべき事だせう。努力の作たるは一點疑ひの余地がありません。研究の態度の眞摯なるが何よりうれしく、結構も堂々たるもの、取材の範圍、配列もまづ妥當と思はれます。但し緒論に於て、研究の目的を述べしはまだしも、『詩人とは何ぞや』はななくもがなと思はれます。支那詩の變遷も、もう少しあつさりした方がよく、香山の生活の史的背景を髣髴せしむるだけに留めたいものです。要するに細評すればまだく首肯し難い節もあり、就中傳者の態度眞摯とは云へ餘りに主觀的陶酔的、嘆賞的なのは此程の文にはふさはしからぬの感じがしなくてもありません。又措辭にも一工夫と洗練とを要する所が少くありません。しかし、かゝる大いなるアルバイトに指を染められたる努力と勇氣とは評者の飽くまで敬服して措かざる所であります。

『清吉』佳作。構想。描寫、性格等極めて自然にして無理なく渾然たるに近きもの主人公清吉の心理描寫

も氣持よく、これに配せる八重子の快活な明るい、お轉婆な性格が彼のデカダンの、病弱な、陰鬱な性格と相俟つて頗るアンシャウリヒに浮き出てゐます。殊、大多數の應募者が陥れる當て字、誤字等を此の作者に於て最も少なく見出したのは甚だ愉快でした。尤も『一時の偷安を盗む……』の如き表現はありましたが……

『五ヶ條の御誓文』解説の内容に新味の横溢せるを喜びます。新人の肺腑を貫いて溢出せる時代思潮の片鱗を古くしてしかも永久に新しかるべき此の五ヶ條の御誓文を通して見得るを喜びます。

『快樂及生活のイズム』にしての快樂主義の可否論者の言はんと欲する眼目、主點はいふ迄もなく結論にあるらしい。もししからずとせば此論文はA、B、Cの三章を以て獨立、完結せる一篇となすか、又は極めて簡潔に快樂説、功利説の解説を以て序論とし、直ちに結論を本論となして、更に十分に橡大の筆を揮はれたらばと思ひます。結論、龍南の思想界を叙して。快樂、功利二派の分野を定め、その是非をあげつらうて、末段、二者を打つて一九となし、不偏

不黨の所謂 goldener Mittelweg を取りたる御手際、さすがに君も亦老巧なる功利派には非るか何々。

妄評多謝。

## 同

敬 授 高 木 市之助

今度は多數の應募者があつて審査の上に骨は折れたけれども、張り合があつて少數の場合よりも愉快であつた。一般的には昨年迄よりも小説の方がすぐれ、論文の方が落ちた様に思ふ。例によつて所感を赤裸々に述べて見ると。

清吉。出色の作だと思ふ。冷かにではなく併し靜かに物を觀て行つた態度が好い。よくある様に、作中の人物に對して憶面もなく安價な同情を浴せたり、筋の上に態とらしい細工を施し、好きな人物を取り組ませて面白がつてる様な所もなく、それかと云つて、之もよくある事だが、小説にするにも及ばない様な平凡な思想？を無暗に並べる弊もなく、事件も相應に賑やかだし、主人公の心理も或る程度迄説明がついて居る。つまり一番小説らしい小説だと云へる

無論よい意味で。

白香山の生活と其二雄篇。先づ第一にあの茫然たる長慶集にぶつつかつた作者の勇氣を多としなければならぬ。本文中の引用詩句は大抵有名なものばかりで必ずしも直接全集を涉獵した証左とはなるまいけれども、批評や推定中には論者の閱讀範圍が有りふれた白氏選集類以外に擴がつて居る事を想はせる節が少くない。一篇の規模も巨人樂天を取扱ふにふさはしい堂々たるものである。『支那詩の變遷』三章も多少岐路に踏み込んだ嫌があるが、かう云ふ大掛りの作では大した目ざわりにもならない。欠點としては、論者自身が白氏の欽仰讚嘆に浸つて、肝心の彼の特性を指摘する事を怠つた事だ。白氏がどんなに他の偉人杜甫や東坡に通ずる所を有つて居るかに就いては論者が諸所に反覆縷説して居る所であるが、反對に彼の眞に彼たる所以、少陵、東坡乃至他の如何なる詩人でも彼であり得ない所以は一向語られて居ない。一例を挙げると作者は第十章の中途で事の序に白詩の平明に言及して居るが。此點などは決して數行で片附けて置く性質のものではなからう。此

の表現上の大特長は彼の藝術觀とも深い交渉を持つて居る筈であり、彼の個性を把握する上にも誠に便利な表はれである。なせ此點をも一步進んで舊來の説明以上に何ものかを引き出さうと試みなかつたか之は一例であるが、一般に此方面の觀察が不足して居る。論者があれ程熱心に呼號し絶叫して居るに係らず、讀過後の印象が何となく、鮮明を缺いて居るのは此爲でもある。それから引例があまり多きに過ぎはしないか讀者の側から云へば之も亦面白い。けれども其は論者の關知しない原詩の興味である。本篇なども動もすれば白詩其のものゝ興味が論の興味を壓倒し勝ちになる様だ。此點に就いて今後は一考を煩したい。要するに、欠點もあるが全体として頗る眞摯な一大勞作として推奨するに足ると思ふ。

蕎麥の花。文に一種氣持の好い力強さがある。水が盛り上る様になつてムクムクと湧き出て居る様な處がある。會話や地の説明には随分技倆の覺束なさを見出す代りに主人公の性格は今度の小説の中で一番よく出て居る。よく幻想する青年、何處かに狂味を持つた男——あの夢だこととわつて居る、部分さ

へ實は、彼の幻覺をさう感違ひして居るのではないかと思はれる程に病的に見ゆる男は作一ぱいに生きて居る。要するに作も作者も頗る素質の好い未來のある未成品と云ふ所だ。

五ヶ條の御誓文。厭味のない文章ではあるが、論理があまり窮屈に行きわたり過ぎて居る。『故に』然るに』で縛り過ぎて居る。もう少し自由奔放に熱した處があつて欲しい。論理ばかりで攻めて行く文章は讀者の理性を説服する事は出来るけれども、意志や感情を合せた讀者其人を動かす事は困難である。尤も本文の價值は文章の内容よりも却つて作者が此の五ヶ條の御誓文を主題に選んだ其眞摯な思ひつきにある。今日國民が大切にしまつて置いて、平氣で居る、或は忘れて居る御誓文に注目して、實際の國民生活にあて嵌る様に正當に解釋しようとした企畫そのものにある。と自分は思ふ。

心と心。別々の世界に住んで居る幾つかの心のさびしい交渉と云つた様なものは確かに出て居る。けれどもまだ十分具象化されては居ない。所々あぶなく生ナまな概念が露出しさうだ。之は一には作者があ

まり焦慮つて、事件を運ばうとしたせいでもあらう臺詞は一般には中々手に入つて居る殊に端役の輕いことばなど巧いものだ。しかし話が少しこみ入つて來ると未だ生硬だ。らしくない。例へば清盛の長話など餘程苦しい。舞臺の繪畫的効果は一番よく行つてゐる。どの場面にも相應に統一があるし、人物の配置も餘程考へてある。處女作としては、又小説は比べて數倍六つかしい脚本としては好い出来だと思ふ

其他の作に就いて云へば。小説の方では、『彼岸の夜』は非常に巧者な作であるが、構想や態度が家庭小説めいて力強い處がない。會話なども何處か新派劇の聲色めいた處がある。出来ない迄も多少し芳烈な藝術味を志して貰ひたい彼れ文優れた才を持つて居て惜しいものだと思ふ。『町へ』も野村愛正氏風の心理描寫には細く行届いた處あるが、どうも全体が微温的である、もしきびくした筆觸が欲しい。

『若き母』は甘過ぎる。『何の爲』と『夜店』とは寧ろ小品文で、中に愛すべき點もないでは無いが前評の比較的大規模な論文や小説に比較する事は出来ない。論文では、『快樂の本源云々』は後半作者の感情と論



旨とが反對の方向を取つて兩者が消し合つて居る様子が筆端の現れて居る。最初の學說と後の論との連絡も必然的に行つて居ない。南君のは前回の懸賞文で批評したのと大差無いが、詩的幻想めいた部分と哲學的考察めいた部分とが相交錯して讀者を迷宮に誘ふ弊がある。

妄評多罪。

## 師の計

嗚呼立山先生よ。大塚先生よ。これ大正七年。方に年を同じうして逝かせらる。生等轉た追懷と悲哀とに茫然たらざるをえず。前の師。後の師。幽明境を隔て給ふや相逐ふ急にして半歳を待たず。兩師共に春秋に富ませ給ふ。あゝ皇天何ぞ無情。生の立山先生の計を知るは今茲八月中東都日本橋區寶文館書肆にて偶然九州日日を得て之を心なく讀みし時にあり。師。秋田に歸沒せらる。爾來秋田なる地名と共に師を追懷せざる時なし。蓋し秋田、方に我が夢寢だも忘るゝ能はざる地なればなり。今熊本に來

りて師の教を蒙りし友の言を聽く。師最も頭腦明快數理學の天才たり。教授法の奧妙を得て諸生崇敬措く能はざる所と。

あゝ今やなし。今や逝かせ給ふ。

フイールターゲ。これ嘗つて大塚先生の生等に教へられし獨文小説なりき。何ぞその御聲の玲瓏として我が心に響き來るの盡きざる、師の柔和なる御容今に心を離れず。あゝ十二月六日、雨悲し香煙縷々として絶えざる淨行寺内、讀經の聲に涙袖を絞る者場に滿つ。午后七時十分上熊本驛に謹んで先生の遺骨を送り奉る。

悲しき汽笛。悲しき汽車の北に消ゆく影。あゝ凄寥なるかな龍南。我れ龍南に來りて味ふ悲痛、今益々深み來にけりな。悲雨激しく降る。悲雨激しく降る今年龍南の二人の尊き師を永へに失ひしを悲しみて

(南)

# 職員異動

大正七年四月廿五日

陸軍歩兵少尉伊藤達夫本校教授任官

七月十五日

教授江部淳夫文部省督學官轉任

八月九日

教授立山林平逝去

九月二日

藤岡茂講師囑託

全 全

田中義能本校教授任官

全 全

教授長谷川貞一郎依願免本官

九月六日

三重縣立第四中學校教諭今村

考三本校教授轉任

十二月十六日

淺子正一劍道教員囑託

十二月五日

教授大塚治雲逝去

## 大正七年度龍南會豫算

(大正七年三月決定)

### 收入之部

通常會員會費

二四〇〇、〇〇

新入會員入會金  
名譽會員會費  
預 金 利 子  
前年度繰越  
計

二六〇、〇〇  
六六〇、〇〇  
一〇、〇〇  
九〇、〇〇  
三四二〇、〇〇

### 支出之部

端艇建造積立金  
基本積立金  
各部選手遠証旅費  
師 範 謝 禮  
會計事務取扱費  
豫 備 金  
無 所 屬  
演 說 部  
雜 誌 部  
劍 道 部  
柔 道 部  
弓 術 部  
野 球 部

三三五、〇〇  
一一、〇〇  
三六五、七一  
一二〇、〇〇  
一〇、〇〇  
五二、一七  
六八七、〇〇  
八二、〇〇  
五二二、〇〇  
一一四、七七  
一三三、〇〇  
一二一、一五  
一八三、七〇

庭球部 一七二、八〇  
端艇部 三九一、九五  
水泳部 一一七、七五

計

三、四二〇、〇〇

## 編輯を了りて

南 清之助

○茲に辯解をして編輯者の本能を暴露しておきます  
今度雜誌部は物價騰貴の爲紙價も昂り意外の費あれ  
ば記念日の記事も大削りに削り懸賞文の方も、よい  
加減に後始末する積り。それで當選の方には一様に  
賞牌を差上げます。懸賞文は今年意外の景氣を呈し  
すべて十二篇。一番目立つたのは今田君の原稿用紙  
八十五枚に仕上げた作、はじめから一等と思つた通  
り一等、二等の佐々木君のは締切後私の手にござい  
たのでしたが。審査の中に採られて幸いです。卷頭  
の佐久間先生の論文は先生の龍南に遺しおかれる、  
なつかしき賜物にて、委員一同、深大の感激を以て  
先生の風貌を偲ぶすがと致す次第です。どうか先

生よ。仙臺に在られるとも、龍南に清き思想の漲れ  
るを思出られてふみおこせ給はらんことを。審査の  
御勞を御依頼せし佐久間先生、宇佐美先生、野口先  
生、西澤先生、高木先生、戸澤先生には茲に謹んで  
御禮申上ます。宇佐美先生が途中御病氣のため御辭  
退せられたのは残念でした。

今年長江先生の審査員たらしむ事を不審の方があ  
りましたがあれは先生が御辭退によるのですから悪し  
からず。それから校正中忙しさの爲め取落しがあり  
ましたら、どうか御注意を。他にも原稿がありました  
が何分紙價に制限されて。今年龍南文壇のかくも勃  
興せる時にめぐり遭ひし我等五名のもの、かくも精  
力を注がれし懸賞文應募者諸君の健在を祈りつゝ、一  
言こゝに。(十二月九日夕)

## 御斷り

本號は流行性感冒の爲め、印刷所の手順相違し、殊に年末にて  
非常の多忙を極め工程意に任せず、爲めに本號に掲載する書  
なりし部報も不得止省暑し、新年を期し別冊として印刷配付す  
る事さしたり諸子願くば之を諒せられん事を。